

三礼諸注における「黄氏」補訂

及びその周辺の問題について

——黄裳を中心に——

梶田 祥嗣

一 問題の所在

黄裳（一〇四四—一一三〇）、字は冕仲、号は演山、紫元翁、諡は忠文、福建南劍州の人。元豊五年の殿試で神宗から状元拔擢の恩を蒙ったことで知られる。紹聖・元符年間には曾布の派閥に属し、蔡京の三舎法を、「宜近不宜遠、宜少不宜老、宜富不宜貧、不如遵祖宗科举之制」（呉曾『能改齋漫録』一三「罷舎法卒如黄裳言」、『直齋書録解題』一八「演山集六十卷」条等）と批判する言は人口に膾炙した。思想的には王

安石学派と関係があり、王安石の経義を最も早い時期に受容した人物のひとりである¹。また、禪や道教にも精通していたようで²、晩年には『政和万寿道藏』主編の任を負っている³。

著作には『演山先生文集』（静嘉堂文庫本⁴。以下、『演山集』と略称）六十卷、『周易・州講義』一篇（『演山集』一二に「澶州講易序」のみ所載、『経義考』一二）、『周礼義』六篇（『演山集』三八・三九所載。同二二に「講周礼序」所収）、『楽記論』一篇（『演山集』四二「論 楽記」を指すか。『経義考』一六七）、『春秋講義』（佚文）がある。この他にも、衛湜『礼記集説』等には黄裳の礼記に関する注が収録され、これらのほとんどは『演山集』の「雑説」に収める。

『演山集』は、「歴年浸久中遭危乱、先生遺文類多散逸。先生之子孫毫聯縷緝次為家集、而他人或未之見也」（「題演山先生文集後」）と元来完本ではなく、黄裳の子孫が佚文を収集して編纂されたものである。『演山集』全六十巻もの文量は、王学門下と比べ飛び抜けて資料が残っているといえよう。ただ、このような資料面での好条件にもかかわらず、従来の黄裳研究は文学方面の詞が大半を占め、思想的観点からはほとんど顧みられなかった。黄裳の思想研究は資料整備の段階から始める必要があり、本論文はそのような問題意識のもとで論究を試みた一結果である。

筆者は三礼関連の経解において黄裳の佚文の有無を確認したところ、その作業の過程で、本来黄裳の注であるはずのものが他者のものとされているケースを複数発見した。そこで以下では、まず「黄氏」を繞る錯誤の補訂を行い、次にそのような錯誤が生じた原因を解明するために思想史的な問題にまで考察領域を拡げて論証を行う。

二 「黄氏」補訂

補訂作業に用いた黄裳注所引の注釈は以下の通りである。宋代では王与之『周礼訂義』八十卷、衛湜『礼記集說』一六〇卷、元代では陳友仁『周礼集說』十卷、呉澄『礼記纂言』三十六卷、明代では邱濬『大学衍義補』一六〇卷、柯尚遷『周礼全経釈原』十四卷、王志長『周礼註疏刪翼』三十卷、清代では鄂爾泰等撰『欽定周官義疏』四十八卷、納喇性德『陳氏礼記集說補正』三十八卷、張廷玉等撰『日講礼記解義』六十四卷、陳金鑑『宋黄宣献公周礼說』（清道光十年（一八三〇）刻、剡東陳氏五馬山樓鈐本。以下、『周礼說』と略称）五卷で、『演山集』と合わせて計十二書である。「黄氏」の補訂対象はこのように宋代から清代までと幅広いが、なかでも最も早い段階で錯誤が認められる注は『周礼訂義』であり、その錯誤の多くが黄裳注を黄度（一一三八―一二二三、字文叔、号遂初、紹興新昌人）のものとしている。黄度『周礼說』の輯佚本である清、陳金鑑『周礼說』にも同様の傾向が認められ、『周礼訂義』と重複する注も合わせて計十九条もの錯誤が確認された。夏微氏の統計によれば、『周礼訂義』中に引用されている黄度『周礼說』は合計六七六条であり、『周礼訂義』の約五十家中で第六位と比較的分量が多い⁵。ただ、夏氏は黄裳については一切触れずに、また黄度注の中に黄裳の注が紛れていることも指摘していない⁶。

陳友仁『周礼集說』⁷及び王志長『周礼註疏刪翼』の「黄氏」は管見の限りすべて黄裳の注であり、黄度

注は集録されていない。柯尚遷『周礼全経釈原』所収の「黄氏」は全八条。柯尚遷は恐らく「黄氏」を黄裳注として認識しているが、そのうち一条は黄裳注ではなく黄度のものである⁸。

礼記系の注については、衛湜『礼記集説』の「黄氏」は一〇七条（本文のみ）で、巻頭の「名氏」に「演山黄氏（敏求）九経余義。延平黄氏（裳）字冕仲。長樂黄氏（榦）字直卿」とあるように、引用には「出身地＋黄氏」が明記され、三者の注が混在している。この他に、単に「黄氏」とのみ表記された注も一〇七条中三十八条確認され、同じく黄敏求、黄裳、黄榦の三名の中のいずれかに当たる。

また『欽定礼記義疏』に収める宋代の「黄氏」は、黄敏求、黄裳、黄度、黄榦、黄仲炎、黄震の六家である（「引用姓氏」）が、そのうち黄裳注は「黄氏裳」として全十一個を載せる。もっとも実際には黄裳ではなく他者のものも誤って混入している。また黄敏求の「引用姓氏」に「黄氏（敏求、演山）」とあるが、「演山」は「兼山」の誤りである（因みに「演山」は黄裳（冕仲）の号）。『日講礼記解義』には「黄氏裳」を全一個載せる。

基本的に明清の注は宋元の孫引きの域を出るものでないため、本論文では陳金鑑『周礼説』を除き、明清の注は全て二次資料として参考程度に扱った。ここでの補訂作業は王与之『周礼訂義』及び陳金鑑『周礼説』を主な対象とし、『演山集』や他の注釈との比較から錯誤を改める方法を取る。

この二書を主な補訂対象に据えた理由は他にもある。詳しくは以下で言及するが、端的に言えば、『周礼訂義』は「黄氏」を繞る錯誤の元凶であり、『周礼説』はその錯誤を「集成」した輯佚本と考えられるためである。よって『周礼訂義』と『周礼説』における錯誤を改訂することで黄裳注補訂はほぼ網羅できよう。

そこでまず、『周礼訂義』における錯誤五条を提示し、その後で『周礼説』の錯誤を合わせた計十九条を挙げていく。紙数の関係上、若干の異同のみ認められる注については、煩をさけて逐一全文を掲載せず書名を指摘するに止めた。なお、補訂作業にあたり『演山集』以外は主に四庫本を利用した。本来であれば善本を用いて補訂作業を進めるべきだが、本論文は「黄氏」の割り出しと錯誤が生じた背景にある問題の二点を中心に取り上げたため、善本による校勘を割愛したことを予め断っておく⁹。

以下では、第一に錯誤の元凶と思われる『周礼訂義』（Ⅱ①）を挙げ、第二にその錯誤を証明するために『演山集』（Ⅱ②）を、第三以降は他の注釈に所載の黄裳注（Ⅱ③）を列挙する。黄裳の『演山集』の引用については全て「雑説」（『演山集』巻四七～六〇）所収であるため、書名と巻数のみを記す。また、『周礼訂義』・『演山集』以外の注でこの両書と同文の注を「Ⅱ」、若干の異同は認められるがほぼ同文である注を「Ⅲ」で示す。

補訂（Ⅰ）

①黄氏曰、財用之数、驗之以書契、督之以要成、證之以貳令、考之以参互、制之以式法。辨之有類、執之有総、少数之則乗、大数之則會。職内所叙、職幣所振、雖余財、必加嚴焉。

（王与之『周礼訂義』一一）

②天下之事無財不立、天下之民無財不聚、以礼防民、以義制事、無財不行。周之設官三百六十、以理

財責群吏、其法尤嚴而不敢緩也。財用之数、驗之以書契、督之以要成、證之以貳令、考之以參五
〔「互」の誤り―筆者注〕、逆之以式法。辨之有類、執之有総、少数之則乗、大数之則会。職内所叙、
職幣所振、蓋雖余財、而加肅焉。
(黄裳『演山集』四九)

③黄氏曰、周公設官、理財者居其半。財用之数、驗之以書契、督之以要成、證之以貳令、考之以參互、
制之以式灋。辨之有類、執之有総、少数之則乗、大数之則会。職歳所叙、職幣所振、雖余財、而加肅
焉。
(陳友仁『周礼集說』三)

④黄氏曰、周公設官、理財居半、財用之数、驗之以書契、督之以要成、證之以貳令、考之以參互、制
之以式。辨之有類、執之有総、少数之則乗、大数之則会。職歳所叙、職幣所振、雖余財、然猶加肅焉。

(柯尚遷『周礼全経釈原』三)

⑤黄庶曰、周公設官、理財者居其半、財用之数、驗之以書契、督之以要成、證之以貳令、考之以參互、
制之以式法。辨之有類、執之有総、少数之則乗、大数之則会。職歳所叙、職幣所振、雖余財、而加肅
焉。
(邱濬『大学衍義補』二二三)

⑤の「黄庶」とは黄庭堅の父(一〇一八―一〇五八、字垂夫)であるが、なぜ「黄庶」としているのかは未
詳。注意すべきは、『演山集』の「周之設官三百六十以理財責群吏」の箇所である。『演山集』をはじめ

『周礼集説』『周礼全経釈原』『大学衍義補』には皆「理財」の語があるが、『周礼訂義』ではそれが見えない。またこの三書では黄裳の上掲文を全て「周公設官、理財者居其半」と書き換えているが、『周礼訂義』ではこの理財に関する説明部分を明らかに削除している。これは何を意味するのだろうか。

「理財」は言うまでもなく王安石の周礼思想を代表するタームであり、この理財思想が後々まで激烈な批判に晒されたことは周知に属する。黄裳は王安石の言う『孟子』所言利者、為利吾国、利吾身耳。……政事所以理財、理財乃所謂義也。一部『周礼』理財居其半、周公豈為利哉」（『答曾公立書』、『王文公文集』八）という理財説を敷衍して、礼による「防民」も義による「制事」も財が無ければ成立しないと説く。この王安石の理財思想を忠実に踏まえた当該注は、思想的観点からみて紛れもなく黄裳のものであることがわかる。

『周礼訂義』に引かれる理財論は、例えば鄭鏐（字剛中、号三山）の「後世青苗取息、名曰利之、適以禍之、非周家立法之意」（『周礼訂義』二四）などのように、王安石の理財を批判する論が多数を占める。もともと王与之自身は他の論者と異なり、王安石の理財論には一部賛成、一部反対の立場を取る。

愚案、『周官』一書、半為理財、大率多是穀・粟・布・帛、出於天之所産、人之所成、上下所頼、以供不窮之用者。在是其実、以錢与世交易絶少、觀司市「国凶荒、則市無征、而作布」、則冶鑄之事有時無、後世窮山竭冶以供鼓鑄者矣。……而邦布之入出、以共百物者、則專掌於外府之一官、則泉布之藏用有限、必無後世貫朽索腐、与夫見錢流地上者矣。以此知當時之国本在農、国計在桑・麻・穀・粟、国用在金玉布帛、則邦布本以權百物之低昂、時出以佐国用之不及。是以未嘗不用夫錢也、開之以百物之共、

而制之以有法之嚴、此邦布所以流行而不匱、變通而不窮。苟上之人不能守經常之法、泛取而襲用之、手頭一開、而邦布不給、冶鑄一興、而邦本始病矣。¹⁰

〔周礼訂義〕一〇）

王与之は古今の理財制度を比較し、現行の財貨偏重の經濟政策が理財疲弊の元凶であると分析する。このような経世致用の目的から提出された理財論からは、王与之における永嘉事功派の影響が見て取れよう。

問題は、『周礼訂義』において何故理財部分の削除が行われたのかということだが、今のところ決定的な証拠は見当たらない。そもそもこれが黄度の手によるのか、それとも引用した王与之のものか、それさえも判然としない。ただ少なくとも、何者かが理財という王学臭を意図的に消したうえで、黄裳注を黄度注へとすり替えていることは確実である¹¹。

補訂（2）

①黄氏曰、祭祀朝会、師甸封建之時、王在五路、其步趨之節責大馭焉、五路之上、王安佚矣。然而顧車之行而聞肆夏之声、則猶行於堂下。顧車之趨、而聞采齊之声、則猶行於門外。造次無非礼者、樂師之所教、大馭之所馭、与有力焉。

〔周礼訂義〕三九）

②四肢之於安佚、人之情也。樂狗其情、惡勞其形、不能非礼勿動、而使非僻之心輒乘安佚以蹈其舍、則無所不至矣、而況王乎。天下視儀而動、聽唱而応者也。先王制礼、視有旒、聽有纘、言有紀、動有佩。堂上之行、門外之趨、為之樂儀、以防其肆。使聽其声而其意以誠、使顧其体而其氣以正。周旋中

規、折旋中矩、進揖退揚、而後鏘鳴之佩左中角徵、右中宮羽。君民事物之意在其中焉、非僻之心無自而入。是故祭祀朝會、師田封建之時、王在五路、則其步趨之節責大馭焉、五路之上、王安佚矣。然而顧車之行而聞肆夏之声、則由吾於堂中。顧車之趨、而聞采齊之声、則由吾於門外。王之言動、造次無非礼者、樂師之所教、大馭之所御、与有力哉。

〔演山集〕五二

③黄氏曰、……㉔②

〔周礼集說〕五

④黄氏曰、……㉔③

〔周礼註疏刪翼〕一四

『周礼註疏刪翼』は『周礼集說』の孫引きであるため引用は省略した。以下もほぼ同様である。

補訂（3）

①黄氏曰、進則患怯、退則患紛。軍將執晋鼓以銳其進、卒長執鐃以肅其退。

〔周礼訂義〕四八

②進則患怯、退則患紛。故軍將執晋鼓以銳其進、卒長執鐃止鼓以肅其退。鼓退而止之、訓習之終。鼓作而通之、鼓行而節之、訓習之始。惟其訓習之始、不可不慎其乱。故兩司馬執鐃、所長者寡、所聽者詳故也。節鼓慮其過差、尤可慎者。故惟五人而一節焉。師帥之於一軍、有不能進者、自為二千五百人、所主而已。晋則聽將軍焉、故執提鼓而已。

〔演山集〕五〇

③黃氏曰、進則患怯、退則患紛。故軍將執晉鼓以作其進、卒長執鐃以肅其退。〔周禮集說〕六

④黃氏曰、……」③
〔周禮註疏刪翼〕一八

補訂（4）

①黃氏曰、諸侯平居無事之時、王者於德意志慮、則道之使知。度量法則、則論之使同。好惡已一於心、用捨已一於事。及其入王、又會而圖之、以四海為一家、以中國為一人、蓋如此。〔周禮訂義〕六七

②諸侯平居無事之時、王者之使相繼於道。德意志慮、道之使知。度量法則、論之使同。好惡已壹於心、用捨已壹於事。及其入王、則又會而圖之、收衆見以為王明、合衆善以為王道、以四海為一家、以中國為一人、蓋如此耳。
〔演山集〕五一

③黃氏曰、諸侯平時無事之時、王者之使相繼於道。德意志慮、道之使知。度量法則、論之使同。好惡已一於心、用捨已一於事。及其入王、則又會而圖之、收衆見以為王明、合衆善以為王道、以四海為一家、中國為一人、蓋如此耳。
〔周禮集說〕九上

④黄氏曰、……②③

〔周礼註疏刪翼〕二五

⑤黄氏曰、……②③

〔周礼全經釈原〕一一

⑥黄氏度曰、……①

〔欽定周官義疏〕三八

この補訂で注意すべきは、『周礼』秋官掌交「道王之德意志慮」を繞る解釈である。經文では、「道」を「いう」と読んで、王の德意志慮を宣伝する意に取る¹²が、②の黄裳注では「德意志慮」の前に「王者之使相繼於道」の句を挿入して、經文にはない「道」と「德」とを対比する議論を加える。他方、『周礼訂義』及び『欽定周官義疏』ではこの部分を削除している。興味深いことに、この黄裳注と類似する解釈が王昭禹『周礼詳解』にみえる。

天地不交而万物不生、上下不交而功勳不成。先王設官掌邦国之通事、而結其交好、此其名官所以謂之掌交歟。掌以節予幣者、節謂道路、用旌節以表之也。幣謂掌邦国之通事、而結其交故也。……上者下之儀也。彼將視儀而動矣。道王之德意志慮、所以為之儀唱。王之得于己者、德也。王之心有所感發者、意也。王之心有所之者、志也。王所思慮而予防之者、慮也。德之所存、意之所發、志之所之、慮之所定、好惡之実存于其間矣。掌交道王之德意志慮、使之咸知王之所好而行之、咸知王之所惡而辟之、蓋王之所好非作好也、無非遵王之道而已。王之所惡非作惡也、無非遵王之路而已。遵王之道以為好、則所好者皆上下之所同、人孰不歛。然而行之乎遵王之路以為惡、則所惡者皆遠近之所同、人孰不協。然

而避之乎其行之也。若趨利、而不自己其避之也。若畏法、而不敢犯天下。人豈有私好惡哉。先王之時、

道德一、風俗同、天下如一家、中國如一人者、掌交与有力矣。〔『周礼詳解』三四、秋官掌交注〕

『周礼詳解』は王安石『周礼義』の注釈本であり、『周礼義』の佚文を多数所収する。『周礼義』四庫本及び程元敏『三經新義輯考彙評（三）——周礼（下）』では、「以幣者、掌邦国之通使事、而結其交好故也。此其官所以謂之掌交与。道王之德意志慮、則与擲人之誦王志異矣」を『周礼義』の佚文として挙げ、『周礼詳解』にみえるような「道」と「德」の対比に関する部分は集録しない¹³。

この道德の二分法は王学を特徴付ける思想構造の一つであり、「王建大常、則志天道也。諸侯建旂、則志君德也」（王安石『周礼義』春官司常注）というように、主に「道」が形而上的及び最高位の境地や聖人、「德」がその道の形而下的顯現及び君子を説明する場合に用いられる¹⁴。黄裳も「以意致德、以神会道之人、居則麗乎方、動則麗乎形」（『雜說』、『演山集』五二）のように「意」も「德」と同じく道的作用が形而下に顯現した意志を言い、このような道德概念は『演山集』中に散見される。『周礼集說』及びそれを襲う『周礼註疏刪翼』以外の『周礼』諸注はほぼ黄度のもものと見なしているが、思想構造の類似性から勘案すれば、実際にはこの注が黄裳のものである可能性は極めて高い。

補訂（5）

①黄氏曰、当諸侯之入王、為之朝礼、而貴貴之教寓焉。為之燕礼、而老老之教寓焉。其朝也、公於上等、侯伯於中等、子男於下等、各以其礼擯之、貴貴也。其燕也、公三燕、侯伯再燕、子男一燕、各以

其齒坐之、老老也。貴貴者禮也、老老者仁也、賢賢者義也。爵也、齒也、德也、同為天下之達尊、而仁之於天下也、尤不可食頃廩焉。故四代之燕、或貴爵、或貴德、或貴齒、或貴親、各從其所貴而加之。然不以爵之尊卑、德之小大為之序者、序齒而已。尚齒仁也、尚老又其仁之至也。〔周禮訂義〕六八)

②以貴而驕、以富而侈、諸侯之常態也。其驕也廢恭、其侈也廢儉。廢恭之至、不能貴貴也、其弊為無君。廢儉之至、不能老老也、其弊為無父。父且無之、況其君乎。先王憂其然、當其入王也、為之朝禮、而貴貴之教寓焉。為之燕禮、而老老之教寓焉。為之饗禮也、設几而不倚、所以訓其恭、爵盈而不飲、所以訓其儉。其朝也、公於上等、侯伯於中等、子男於下等、各以其禮擯之、貴貴也。其燕也、公三燕、侯伯再燕、子男一燕、各以其齒坐之、老老也。貴貴者禮也、老老者仁也、賢賢者義也。爵也、齒也、德也、同為天下之達尊、而仁之於天下也、尤不可以食頃而廩焉。故四代之燕、或貴爵、或貴德、或貴齒、或貴親、各從其所貴而加之。然而不以爵之尊卑、德之小大為之序焉、序齒而已。齒之長者先乎少、齒之老者先乎長。尚齒仁也、尚老又其仁之至也。

〔演山集〕四七)

③黃氏曰、先王當諸侯之入王、為之朝禮、而貴貴之教寓焉。為之燕禮、而老老之教寓焉。其朝也、公於上等、侯伯於中等、子男於下等、各以其禮擯之、貴貴也。其燕也、公三燕、侯伯再燕、子男一燕、各以其齒坐之、老老也。貴貴者禮也、老老者仁也、賢賢者義也。爵也、齒也、德也、同為天下之達尊、而仁之於天下也、尤不可以食頃而廩焉。故四代之燕、或貴爵、或貴德、或貴齒、或貴親、各從其所貴

而加之。然而不以爵之尊卑、德之小大為之序焉、序齒而已。齒之長者先乎少、齒之老者先乎長。尚齒仁也、尚老又其仁之至也。

（『周礼集說』九下）

④黃氏曰、……」③

（『周礼註疏刪翼』二六）

この箇所では各注ともに異同は少ないが、①『周礼訂義』と③『周礼集說』との類似から、『周礼集說』は『演山集』から直接引用したのではなく、『周礼訂義』の該当箇所を孫引きしている可能性が高いといえる。いずれにしても、この注は黃度でなく黃裳によるものであることは確實であらう。

三 陳金鑑『周礼說』補訂

本章では『周礼訂義』と同じく黃裳注を黃度注と錯誤している陳金鑑『周礼說』の補訂を行い、以下で、①『周礼說』、②『演山集』、③『周礼集說』、④以降は明清の注を周礼、礼記の順で年代ごとに簡条書きで示す。第二章の『周礼訂義』補訂と重複する注は『周礼說』のみを挙げ、他の注は省略した。『周礼說』中の「」は割注（小字）を指す。また、『周礼說』・『演山集』以外の注でこの両書と同文の注を「＝」、若干の異同は認められるがほぼ同文である注を「㊤」で示す。

補訂（1）

① 凡斉所眎、和所多、会所宜、節王之欲、可謂備矣。是故王心常清、不為物所淫。王体常寧、不為物所傷、然後能以礼義節人之欲焉。〔宋陳氏友仁『周礼集說』〕
（『周礼說』一、天官冢宰）

② 凡斉所眎、凡和所多、凡会所宜、節王之欲、可謂備矣。是故王心常清、不為物所淫。王体常寧、不為物所傷、然後能以礼義養人之欲焉。
（『演山集』五五）

③ 黄氏曰、凡斉所眎、和所多、会所宜、節王之欲、可謂備矣。是故王心常清、不為物所淫。王体常寧、不為物所傷、然後能以礼義節人之欲焉。
（『周礼集說』三）

④ 黄氏曰、…… ①③

（『周礼註疏刪翼』三）

⑤ 延平黄氏曰、…… ②

（『礼記集說』七〇）

この五つの注は文中の略述（「凡」字の省略）と改変（「養人之欲」を「節人之欲」に作る）から二つの系統に分けられる。ひとつは黄裳『演山集』とそれを引用する衛湜『礼記集說』で、もうひとつは『周礼集說』と『周礼註疏刪翼』、『周礼說』である。前者は「延平黄氏」とあるように黄裳注と明記するが、後者

は『周礼集説』及びそれを襲う『周礼註疏刪翼』が「黄氏曰」とのみ記すため、陳金鑑によって黄度注として誤って引用もしくは改竄されたことがわかる。陳金鑑の真意は別としてこのような錯誤が生じた背景には、黄裳の没後、『演山集』がほとんど顧みられなかったのに反して、元代以降、『周礼集説』は明清の周礼注に幅広く引用されたという事情が少なからず影響しているのかもしれない。

補訂（2）

①天有四氣、人有五臟。一氣不備、物受其病、五臟亦然。四齊相廢、則或養其一藏而遺其四、害不淺矣。滑所以調之、慮其不通也。甘所以調之、慮其不和也。甘在內則養脾、在外則養肉。四行無土不可、四味無甘不可、此甘之所以調歟。竅者氣之所由以通者也。竅不利則氣窮焉、此滑之所以調歟。牛羊豕犬鴈魚、天產也。以為膳所以養人之精。稌黍稷粱麥苽、地產也、以為食所以養人之形。精不足於養則氣衰、形不足於養則氣殆。然則膳食之養不可相廢、其宜不可相反所宜「二字、明王氏志長『周礼註疏刪翼』脱」、或失焉、則所養適足以害之耳『集説』、明柯氏尚遷『周礼全經釈原』同」。

（『周礼説』一、天官冢宰）

②飲食所以養人、而養之過卒以害人而已。是故君子養德則慎言語、養體則節飲食。觀『易』之頤而放『周官』之食医、非敢肆也。凡齊則放食医之所昉、凡和則放食医之所多、凡会膳食則放食医之所宜。蓋謂五行之用不能相無、五行之氣不能無過不及。天有四氣、人有五臟六腑。温涼之氣、陰陽之中。寒

熱之氣、陰陽之盛。万物得溫而生育、得暑而長大、得涼而收斂、得寒而堅實。一氣不備、則物受其病焉、五臟亦然。四齊相廢、則或養其一歲而遺其四、養其一腑而遺其五。熱勝而病陰、寒勝而病陽。夫飲養陽氣則宜以溫、食養陰氣則宜以寒、固其理也。……一時之氣有所不及、先王則過於一味以救之。是故春多酸、收斂散也。夏多苦、堅解緩也。秋多辛、散收斂也。冬多鹹、更堅栗也。四味一多、慮其不通焉、滑所以調之。慮其不和焉、甘所以調之。甘之在內則養脾、在外則養肉。蓋於食醫則養脾、於瘍醫則養肉。四行無土不可、四味無甘不可、此甘之所以調歟。竅者氣之所由以通者也。竅不利則氣窮焉、此滑之所以調歟。……牛羊豕犬鴈魚、天產也。以為膳者也、養人之精。稌黍稷梁麥苽、地產也、以為食者也、養人之形。精不足於養則氣衰、形不足於養則氣殆。然則膳食之養不可相廢、膳食之宜不可相失。食醫則又會其所宜、致其所養。所宜或失焉、則其所養適足以害之耳。¹⁵⁾

〔演山集〕五五

③黃氏曰、滑所以調之、慮其不通也。甘所以調之、慮其不和也。甘在內則養脾、在外則養肉。四行無土不可、四味無甘不可、此甘之所以調歟。竅者氣之所由以通者也。竅不利則氣窮焉、此滑之所以調歟。……黃氏曰、牛羊豕犬鴈魚、天產也。以為膳所以養人之精。稌黍稷梁麥苽、地產也、所以養人之形。精不足於養則氣衰、形不足於養則氣殆。然則膳食之養不可相廢、其宜不可相反所宜、或失焉、則其所養適足以害之耳。

〔周禮集說〕三

④黃氏曰、……》③

〔周禮註疏刪翼〕三

⑤延平黃氏曰、……②

〔『礼記集說』七〇〕

⑥黃氏曰、春多酸、收斂散也。夏多苦、堅解緩也。秋多辛、斂收斂也。冬多鹹、更堅栗也。四味一多、慮其不通焉、滑所以調之。慮其不和焉、甘所以調之。甘在内則養脾、在外則養肉。四行無土不可、四味無甘不可、此甘之所以調与。竅者氣之所由以通者也。竅不利則氣窮焉、此滑之所以調与。

〔『礼記纂言』二〕

⑦黃氏裳曰、春多酸、收斂散也。夏多苦、堅解緩也。秋多辛、散收斂也。冬多鹹、更堅栗也。四味一多、慮其不通焉、滑所以調之。慮其不和焉、甘所以調之也。

〔『日講礼記解義』三一〕

⑧黃氏裳曰、天有四氣、人有五臟。一氣不備、物受其病、五臟亦然……致其所養焉。

〔『欽定礼記義疏』三九〕

⑤『礼記集說』は②『演山集』を部分的に省略するもほぼ同文。『礼記集說』の文頭には「延平黃氏」とあり、それを襲う『欽定礼記義疏』も「黃氏裳曰」として黄裳の文とする。『周礼說』は他の箇所においても『欽定礼記義疏』から引用している文が確認されるため、この箇所も本来であれば黄度ではなく黄裳のものという認識があるはずであるが、あえて黄度の注として集録している。よって、この箇所については陳金鑑

による改竄の可能性が極めて高い。

補訂 (3)

①癘疾之作、或感四時之邪氣、或自養之失宜。『素問』曰、「夏傷暑、其病在秋、為痃瘕。秋傷濕、其病在冬、為咳嗽。此自養之失」。「月令」曰、「孟秋行夏令、民多瘡疾。中冬行春令、民多疥癩」。此感時之邪。先王之於時氣、不能使之無邪、而有以裁成之。不能使萬民無癘疾、而有以養之。為之疾瘍之医、所以養萬民之疾。為之礼義之政、所以裁成其時氣。而又為之膳膏齊和、使嘗放焉、所以維持其五臟六腑、此仁民之政也。『欽定礼記義疏』、『集說』。

〔周礼說〕一、天官冢宰)

②癘疾之作、或感四時之邪氣、或自養之失。『素問』曰、「夏傷暑、其病在秋、為痃瘕。秋傷濕、其病在冬、為咳嗽。此自養之失」。「月令」曰、「孟秋行夏令、則民多瘡疾」。此感四時之邪氣。先王之於時氣、不能使之無邪、而有以裁成之。不能使萬民無癘疾、而有以養之。疾瘍之医、所以養萬民之疾。為之礼義之政、所以裁成其時氣。而又為之膳膏齊和、使嘗放焉、所以維持其五臟六腑、仁民之政也。

〔演山集〕五六)

③延平黃氏曰、……》②

〔礼記集說〕四三)

①黃氏曰、癘疾之作、或感四時之邪氣、或自養之失宜。『素問』曰、「夏傷暑、其病在秋、為痄瘧。秋傷濕、其病在冬、為咳嗽。此自養之失」。「行夏令、民多瘡疾」。此感時之邪。先王之於時氣、不能使之無邪、而有以裁成之。不能使萬民無癘疾、而有以養之。為之疾瘍之医、所以養萬民之疾。為之礼義之政、所以裁成其時氣。而又為之膳膏齊和、使嘗放焉、所以維持其五臟六腑、仁民之政也。

〔欽定礼記義疏〕二二三

①の末尾には『欽定礼記義疏』と『周礼集說』からの引用であることが明記されているように、實際に注文を比較してみても、『周礼說』は③④をもとに編集されており、②↓③↓④↓①の順で引用されていることがわかる。ここでも陳金鑑は「延平黃氏」、すなわち黃裳の注と明記された『礼記集說』から引用するにもかかわらず黃度注としている。實際は②③から黃裳注であることは明白である。

補訂（４）

①周公設官、理財者居其半。『集說』。財用之数、驗之以書契、督之以要成、證之以貳令、考之以參互、物之以式灋。辨之有類、執之有綫、小数之則乘、大数之則會。職歲『訂義』作「職内」所叙、職幣所振、雖余財、而加肅焉。『釈原』。案『訂義』作「必加嚴焉」、『集說』作「而加肅焉」。今依『釈原』。

〔周礼說〕一、天官冢宰

（第二章『周礼訂義』補訂（１）参照。）

補訂 (5)

①君子事其尊而遠者、以意為主、事其卑而近者、以物為主。以禮祀祀昊天上帝、以我之意達之、物之形氣不足與焉。日月星辰、風師・雨師、有象者也。山林川沢、四方百物、有形者也。有象者以物之聲臭祀之、有形者以物之形体祭之、是則可矣。昊天上帝、其降而與物接也、不見其形。其升而與物辨也、不見其象。然則如之何致之。無形也、不可薦之以味。無象也、不可達之以氣。先王之於天神以誠意動之、以精意接之。定之以七日之戒、齋之以三日之宿。不御色、不聽樂、不飲酒、不茹葷、眊滌濯、蒞玉鬯、省牲饗、奉玉齎、贊幣爵、告時告備、告純告潔、以誠其意而已。心齋以致其精意、祭祀之齋以致其誠意。先王所以使人誠其意者、將以致精焉。人之意粗則交於物、精則交於神。蓋其理也、有無之間、帝之神明在焉。古之先王、精意與帝感通。夢帝賚予良弼、蓋夫精神之接於帝也、豈粗於意者所能及哉。以恭致莊、而後以默致靜。而後思道以致其虛、此其所以接於帝也。精意以享、其猶孝子之致其親歟。祭之日入室、僂然必有見乎其位。周旋出戶、肅然必有聞乎其容。聲出而聽、愾然必有聞乎歎息之聲。先王之事帝、其亦猶此。嗚呼、鬼神之物非它、即吾之誠是已。『義疏』『集說』。

〔『周禮說』三、春官宗伯上〕

②人情・天道、相為遠近者也。禮之近天道者、人情遠焉、非禮之宜也。鬼神之卑而親者、不可以此事。禮之近人情者、天道遠焉、非禮之至也。鬼神之尊而遠者、不可以此事之。君子事其尊而遠者、以

意為主、事其卑而近者、以物為主、三礼之至。上足以降天神、下足以出地示、中足以致人鬼、無他也。能於三極之道相為近遠而已。以禮礼祀昊天上帝、則以我之意達之、物之形氣不足与焉。……日月星辰、風師・雨師、有象者也。山林川沢、四方百物、有形者也。有象者以物之氣臭祀之、有形者以物之形体祭之、是則可矣。昊天上帝、其降而与物接也、不見其形。其升而与物辨也、不見其象。然則如之何致之哉。無形也、不可薦之以味。無象也、不可達之以氣。……先王之於天神也、以誠意動之、以精意接之。定之以七日之戒、齋之以三日之宿。不御色、不聽樂、不飲酒、不茹葷、眎滌濯、蒞玉鬯、省牲饗、奉玉齋、贊幣爵、告時告備、告純告潔、以誠其意而已。心齋以致其精意、祭祀之齋以致其誠意。先王所以使人誠其意者、將以致精焉。人之意粗則交於物、精則交於神。蓋其理也、有無之間、帝之神用在焉。古之聖王、精神与帝感通。夢帝賁予良弼、蓋夫精神之接於帝也、豈粗於意者之所能及哉。以恭致莊、然後以默致靜。以默致靜、然後思道以致其虛、此其所以接於帝也。精意以享、其猶孝子之致其親歟。祭之日入室、僾然必有見乎其位。周旋出戶、肅然必有聞乎其容。及出戶而聽、愾然必有聞乎嘆息之声。君子之事帝、亦猶是也。天鑑帝省、見其在物之上焉、尊之貴之、惟恐其或失之、精意以享者也。然而精意以享、在乎先王以為至乎。未也。不可以意察。致者不期精粗焉、精意以享是礼而已。……

〔演山集〕五八

③黃氏曰、日月星辰、風師・雨師、有象者也。山林川沢、四方百物、有形者也。有象者以物之声臭祀之、有形者以物之形体祭之、是則可矣。昊天上帝、其降而与物接也、不見其形。其升而与物辨也、不

見其象。然則如之何致之。……蓋其理也、有無之間、帝之神明在焉。……周旋出戶、肅然必有聞乎其容。声出而聽、愜然必有聞乎嘆息之声。先王之事帝、其亦猶此。嗚呼、鬼神之物非它、即吾之誠是已。

（『周礼集說』四）

④黃氏曰、……③

（『周礼註疏刪翼』一二）

⑤黃氏曰、『国語』云、「精意以享謂之禋」。蓋日月星辰、有象者也。山林川沢、有形者也。有象者以物之声臭祀之、有形者以物之形体祭之。惟天也無形、不可薦之以味。無象、不可達之以氣。惟誠意以動之、精意以接之、人之意粗則交於物、精則交於神。蓋其理也、有無之間、帝之神用在焉。……

（『周礼全經釈原』六）

⑥延平黃氏曰、人情・天道、相為遠近者也。……人之意粗則交於物、精則交於神。蓋其理也、有無之間、帝之神固在焉。古之聖王、精神与帝感通。夢帝賚予良弼、蓋精神之接於帝也。

（『礼記集說』六一）

⑦余論黃氏裳曰、君子事其尊而遠者、以意為主、事其卑而近者、以物為主、……

（『欽定礼記義疏』三五）

③『周礼集説』及び⑥『礼記集説』の中略部分は『演山集』とほぼ同じ。『周礼訂義』中には該当箇所は見当たらなかった。ここで注目すべきは、『演山集』「昊天上帝、其降而与物接也、不見其形。其升而与物辨也、不見其象」の部分で、王昭禹『周礼詳解』にも、「然則昊天上帝者、指天帝耳。天者、帝之体、帝者天之用、体嫌於不能降、用嫌於不能辨。故言「其降而与物接」、則以昊言天、言「其升而与物辨」、則以上言帝。「其降而与物接也、不見其形」、不可以形致之、則血腥非所主矣。「其升而与物辨也、不見其象」、不可以氣致之、則燔燎非所主矣。有無之中、帝之妙用存焉。以誠意動之、以精意接之、祭祀之齊則致其誠意、心齊則致其精意、人之意粗則交於物、精則交於神。蓋其理也」とあり、『演山集』と同文の引用が認められ、内容についても著しく類似している¹⁶。『周礼詳解』の「其降而与物接」の前には「故言」とあるように引用文を載せるような表現であること、また『演山集』にも同文を引いていることから、この文の引用元は王安石『周礼義』である可能性が高い。また、②『演山集』では王安石の字説（「神」や「天」）の使用が認められるが、『周礼説』ではその部分がカットされている点も興味深い。黄裳注には間々字説の使用が認められるが、ここにも王学祖述者としての黄裳の性格が窺える。

より問題とすべきは、「蓋其理也、有無之間、帝之神用在焉」の一文である。『演山集』と『周礼註疏刪翼』、『周礼全経釈原』は「帝之神用」に作るが、『礼記集説』では「帝之神固」に、『周礼集説』と『周礼説』では「帝之神明」に作る。「神用」の「神」に関して王安石は、「有無之變、更出迭入而未離乎道。此則聖人之所謂神者矣」（『老子注』第一章）と道の融通無碍な作用の意に解しているが、黄裳も恐らくこれを踏まえていると思われる。また「用」は体用の「用」であると同時に「致用」の「用」の意味を含み、王

安石の言う「神」には「致一論」(『王文公文集』二九)等に見られるように不可侵な道の靈妙さを形而下、すなわち天下において有用たるものとして顕現させる働きが認められる¹⁷⁾。よって『演山集』に言う「帝之神用」は王安石の「神」を典拠とするものであり、逆に『周礼集説』や『周礼説』は注の背景にある思想内容をあまり考慮せずに引用していると言えよう。

補訂(6)

①動物天産也、所以作陰德。能内養其精矣、不以外作之礼而防之、則類為情所流、嘗至於過。植物地産也、以作陽德、能外養其形矣、不以中出之楽而防之、則類為形所踐、嘗至於不及。然則天地之道、百物之功、未之至也、有俟於先王焉。先王之於兩間、以道成能、以仁守位者也。肉雖多、不使勝食氣、則血氣之物不能致其滋味、以乱天一之所生者。非礼勿視、以去其乱色。非礼勿動、以去其淫志。男女之別、媒而後合、幣而後見、祭則受爵、坐則異席、此以礼合。天之化動物之産而防之、故其所作不為淫邪。以楽侑食、動血脈、通精神、使人神清而聽聰、心虚而氣和、則尺寸之膚、不能苟得安佚、以昏其性焉。堂有琴瑟、車有鸞和。楽章之節、以趨以行。玉佩之声、於左於右。弦誦之声、舞蹈之容、遺其『集説』作「去」滯思、形『刪翼』脱「見天性之真楽。耳目口鼻、四支百体、皆由順正。此以楽合地之化、植物之産而防之、故其所作不為倦怠。夫楽由陽来者也。以楽合天之化、動物之産、使陰德無淫邪、与天地同節者也。夫礼由陰作者也。以礼合地之化、植物之産、使陽德無倦怠、与天地同和者也。『集説』、『刪翼』

(『周礼説』三、春官宗伯)

② I 動物天產也、以作陰德、天之化也。植物地產也、以作陽德、地之化也。天之化、動物之產、能內養其精矣、不以外作之禮而防之、則類為情所流、嘗至於過。地之化、植物之產、能外養其形矣、不以中出之樂而防之、則類為形所踐、嘗至於不及。然則天地之道、百物之功、未之至也、有俟於先王焉。先王之於兩間、以道成能、以仁成位者也。

（『演山集』五七）

② II 肉雖多、不使勝食氣、則血氣之物不能致其滋味、以亂天一之所生者。非礼勿視、以去其乱色。非礼勿動、以去其淫志。男女之別、媒而後合、幣而後見、祭則交爵、坐則異席、此以礼合。天之化動物之產而防之、故其所作不為淫邪。

（『演山集』五七）

② III 以樂侑食、動血脉、通精神、使人倫清而聽聰、心虛而氣和、則尺寸之膚、不能苟得安佚、以昏其性焉。堂有琴瑟、車有鸞和。樂章之奏、以趨以行。玉佩之音、於左於右。弦誦之声、舞蹈之容、遣去滯思、形見天性之真樂。耳目口鼻、心智百体、皆由順正。此以樂合地之化、植物之產而防之、故其所作不為倦怠。

（『演山集』五七）

② IV 樂陽也、配地之陰。礼陰也、配天之陽。茲其所以為合斂。目之於色、耳之於声、口之於味、鼻之於臭、四肢之於安佚、性也。有命焉、君子不謂之性。天下之人、豈能皆為君子。然而天產作陰德、而

或能不以色肆視、不以味肆口。地產作陽德、而或能不以安佚肆於四肢。狗性之欲、喪性之善、其得欲也、則勝之有禮樂。其失欲也、則慮之有命。故天下之趨於君子之途、罔或自棄者、先王之防亦已至矣。

〔演山集〕五七

②ⅠⅤ以樂合天之神、動物之產、使陰德無淫邪、与天地同節者也。以礼合地之化、植物之產、使陽德無倦怠、与天地同和者也。

〔演山集〕五七

③黄氏曰、動物天產也、以作陰德、能内養其精矣、不以外作之礼而防之、則類為情所流、嘗至於過。植物地產也、以作陽德、能外養其形矣、不以中出之樂而防之、則類為形所踐、嘗至於不及。然則天地之道、百物之功、未之至也、有俟於先王焉。先王之於兩間、以道成能、以仁成位者也。……

〔周礼集說〕四

④黄氏曰、……③

〔周礼註疏刪翼〕一二

『周礼說』は②『演山集』ⅠⅤⅤを組み合わせで作成されたとみられる。③『周礼集說』の省略部分は『演山集』とほぼ同じ。④『周礼註疏刪翼』はやはり『周礼集說』とほぼ同文。『礼記集說』については該当する注は見当たらなかった。

補訂(7)

①四支之於安佚、人之情也。樂徇其情、惡勞其形、不能非礼勿動、而使乘安佚以蹈『刪翼』作出』之、則無所不至矣、而況王乎。天子視礼而動、聽唱而應者也。先王制礼、視有疏、聽有續、言有記、動有佩。堂上之行、門外之趨、為之樂儀、以防其肆。使聽其声而其意以誠、使顧其体而其氣以正。周旋中規、折旋中矩、進揖退揚、而後鏘鳴之佩左中角徵、右中宮羽。君民士「案『說文』「士、事也」」物之意在其中焉、非僻之心無自而入。是故祭祀朝會、師甸封建之時、王在五路、其步趨之節責大馭焉、五路之上、王安佚矣。然而顧車之行而聞肆夏之声、則由『訂義』作「猶」、下同「吾於堂中『訂義』作「下」。顧車之趨、而聞采齊之声、則由吾於門外。王之言動、造次無非礼者、樂師之所教、大馭之所御、与有力哉『集說』。

(『周礼說』三、春官宗伯中)

(第二章『周礼訂義』補訂(2) 参照。)

補訂(8)

①三從二逆、作内吉、作外吉。二從二逆、作内吉、作外凶。人可違也、卜筮不可違也。筮可違也、卜不可違也。故乃心、卿士庶民与筮之数或可逆、至於龜則有從而已『集說』。

(『周礼說』三、春官宗伯下)

②三從二逆、作內吉、作外吉。二從三逆、作內吉、作外凶。人可違也、卜筮不可違也。筮可違也、卜不可違也。故乃心、卿士庶人与筮之數或可逆者、至於龜則有從而已。蓋卜五、占用二。伍以天道言之、二以人事言之。先王有作、順天循理而已、烏可違哉。況象者、又其數之微歟。

〔演山集〕五一

③黃氏曰、…… ①

〔周禮集說〕五

④黃氏曰、…… ①③

〔周禮註疏刪翼〕一一

補訂（9）

①都家之邑有社稷焉、物之所資以生者也。有五祀焉、人之所待以安者也。有先君焉、國之所因以立者也。有名山大川之在其地者、有因國之在其地而無主後者。都家之治以貴得民、此族矣陰相之者、不可忘也。先王為之頒祀以馭其神、為之宗人以典其祀。而或賜之禽焉、王以不与其祭而重之也。夫為之頒祀以馭其神、為之宗人以典其祀、則都家祭祀之禮、唯王所議。神之所享、唯王所賜。其福安得而不致哉。而況子弟之親、公卿大夫之密邇、壽王以其福、固其願也。祭僕展而受之、膳夫受而膳之。示王享其所致而已。

〔集說〕

〔周禮說〕三、春官宗伯下

②都家之封、公卿大夫之采邑、王子弟所食之邑、有社稷焉、物之所資以生者也。有五祀焉、人之所待

以安者也。有先君焉、国之所以立者也。有名山大川之在其地者、有因国之在其地而無主后者。都家之治以貴得民、此族実陰相之者、不可忘也。先王為之頒祀以馭其神、為之宗人以典其祀。而或賜之禽焉、王以不与其祭而重之也。夫為之頒祀以馭其神、為之宗人以典其祀、則都家祭祀之礼、惟王所議。神之所享、惟王所賜。其福安得而不致哉。而況子弟之親、公卿大夫之密邇、寿王以福、固其願也。祭僕展而受之、膳夫受而膳之。受而膳之、示王享其所致而已。

（『演山集』五八）

③黃氏曰、……」①

（『周礼集說』五）

④黃氏曰、……」①③

（『周礼註疏刪翼』一六）

補訂（10）

①進則患怯、退則患紛。軍將執晉鼓以銳『集說』作「作」其進、卒長執鐃、以肅其退。

（『周礼說』四、夏官司馬上）

（第二章『周礼訂義』補訂（3）参照。）

補訂（11）

①以兵寄農、以教兵寄蒐狩。其赴田役也、猶其在比閭、其赴敵也、猶其在田役。声音服容在鄉則相識於旅、在軍則相識於卒、在田役則相識於芟舍。不測之變、無常之敵、趣之戰也、其与比閭之間、田獵之時無以異也。其孰以為危事哉『集說』。

〔周礼說〕四、夏官司馬上

②以兵寄農、以教兵寄蒐狩。其赴田役也、猶其在比閭、其赴戰陣也、猶其在田役。声音服容在鄉則相識於族、在軍則相識於卒、在田役則相識於芟舍。不測之變、無常之敵、趣之戰也、与其比閭之間、田獵之時無以異也。其孰以為危事哉。

〔演山集〕四九

③黃氏曰、…… ①

〔周礼集說〕六

④黃氏曰、…… ①③

〔周礼註疏刪翼〕一八

補訂 (12)

①先王之德、使民畏而愛之。畏之則寓於刑、愛之則寓於教。然而先王非欲使民畏之。施於德教之不及而已『集說』。

〔周礼說〕五、秋官司寇上

②先王之德、使民畏而愛之。畏之則寓之於刑、愛之則寓之於教。然而畏之非先王之所欲也、施之於德

教之不及而已。

〔演山集〕四七

③黃氏曰、……①

〔周禮集說〕一

補訂（13）

①平國之時、教化既明、習俗既成、以柔治之則非仁、以剛治之則非義、故用中典。中典、先王以立正直之德者也。以刑教中、先王之意也。後世過者、特刑以為威。不及者、置刑以為愛。不能應時而行、豈有他哉。無三德以趨時、無三典以立德。孝文賢君也、未能以德行仁。其廢肉刑也、特免於私情而已、況不仁者乎。先王之制刑也、出於立德。先王之用刑也、出於弼教。故与人情世俗相為重輕。上刑適輕下服、下刑適重上服、此因一人之情者也。大司寇三典所謂刑罰世輕世重、因一世之情者也。〔集說〕。

〔周禮說〕五、秋官司寇上

②一平國之時、教化既明、習俗既成、以柔治之則非仁、以剛治之則非義、故用中典。中典、先王以立正直之德者也。以刑教中、先王之意也。後世過者、特刑以為威。不及者、置刑以為愛。不能應時而行、豈有他哉。無三德以趨時、無三典以立德。孝文之賢、未能以德行仁。其廢肉刑也、特免於私情而已、況不仁者乎。亂國折獄、致刑之時也。教化大明、習俗大成、先王所以待民者、於是乎盡矣。而民之為不善、王何与焉。彼故為不善、以亂吾俗耳、刑故無小、故用重典。重典、先王以立剛德者也。〔書〕曰、

「乃有不吉不迪、顛越不恭、暫遇姦宄、我乃劓殄滅之、無有遺育」。「盤庚」之誥為之先後久矣、雖罪之小者、猶至乎劓之、何傷於仁哉。穆王之時、損刑屬之重者、附益於輕者。成王則殺群飲、其刑至矣。故雖大辟之屬、与墨劓均焉。尚以棄之為不足也、好其親者有之。殺之為不足也、殘其形者有之。然而成王豈以時然而類重之乎。言其所化之民、則用重典可也。故曰、「群飲、汝勿佚」。言商之遺俗、則用輕典可也。故曰、「惟商之迪諸臣、惟工乃涵于酒、勿庸殺之、姑惟教之」。新國議獄、緩死之時也。礼未及修、教未及詳、民之所以為不善者、過也。伝曰、「上失其道、民散久矣。如得其情、則哀矜而勿喜」。民之散也、無八統之馭、無九兩之繫、族師無聯、司救無禁、則民之有是情也、上實為之。新國之君、奚暇責民哉。亦姑教之而已。

〔演山集〕四七

②Ⅱ先王之制刑也、出於立德。先王之用刑也、出於弼教。故与人情世俗相為重輕。有即一人之情而為之輕重、則上刑適輕下服、下刑適重上服是也。有即一世之情而為之輕重、則平国用中典、乱国用重典是也。雖然、三国殊時、而即一人之情而輕重之、豈可廢哉。是故三德之応時也、或剛或柔、或趣於剛柔之中。三典之立德也、或輕或重、或趣於輕重之中。

〔演山集〕四七

③黃氏曰、……Ⅱ①

〔周礼集說〕八

①夫死者不可復生、而先王有大辟之灋、蓋殺一人而後能生其欲死者矣。斷者不可復統、而先王有墨劓宮刑之灋者、蓋刑一人而後能統其欲斷者矣。是故先王有不忍人之政、而肉刑未嘗廢者、豈以不忍人之政、必待肉刑而後存乎。先王之肉刑「三句『刪翼』無、『集說』有」、非特之以傷民也、設之使有懼而已。文帝以當劓者答三百、而民卒多死。夫劓之誠可懼者、答固不足以懼之。然而特答之輕而陷於罪、豈特与劓比哉。後世惜一劓一刑而招其罪至於大辟者、豈勝計哉『集說』、『刪翼』。

（『周禮說』五、秋官司寇上）

②先王之於民、將欲愛之、必固威之。死者不可復生、而先王有大辟之法者、蓋殺一人而後能生其死者矣。斷者不可復統、而先王有宮劓刑之法者、蓋刑一人而後能統其欲斷者矣。是故先王有不忍人之政、而肉刑未嘗廢者、豈以不忍人之政、必待肉刑而後存歟。雖然、先王之肉刑、非特以傷民也、設之使有懼而已。文帝以當劓者答三百、而民卒多死。夫劓之名、誠可懼者、答固不足以懼之。然而特答之輕而陷於罪、豈特与劓比哉。嘗謂後世惜一劓一刑而招其罪惡至於大辟者、豈勝計哉。（『演山集』四七）

③黃氏曰、……」①

（『周禮集說』八）

④黃氏曰、……」①③

（『周禮註疏刪翼』二四）

補訂 (15)

①商人作誓而民始畔、周人作会而民始疑。然則盟誓果非先王之事乎。先王以之輔德信者也。後世德信廢、而盟誓独行於天下。此民之所以畔且疑也。与「集說」無也、「与」字依「義疏」¹⁸。

〔周礼說〕五、秋官司寇上

②商人作誓而民始畔、周人作会而民始疑。然則盟誓果非先王之事乎。先王以輔德信者也。後世德信廢、而盟誓独行於天下。此民所以畔。

〔演山集〕五七

③黃氏曰、……》①

〔周礼集說〕八

④黃氏曰、……》①③

〔周礼全經釈原〕一〇

⑤黃氏曰、……》①③

〔周礼註疏刪翼〕二四

⑥延平黃氏曰、明誓果非先王之事乎。先王以輔德信者也。後世德信廢、而盟誓独行于天下。此民所以疑畔。

〔礼記集說〕二二

補訂 (16)

①諸侯平居無事之時、王者之使相繼於道。德意志慮、道之使知。度量法則、論之使同。好惡已一於心、用舍已一於事。及其入王、則又会而圖之、收衆見以為王明、合衆善以為王道、以四海為一家、以中國為一人、蓋如此耳『集說』。

〔周礼說〕五、秋官司寇下)

(第二章『周礼訂義』補訂(3) 参照。)

補訂 (17)

①先王当諸侯之入王、為之朝礼、而貴貴之教寓焉。為之燕礼、而老老之教寓焉。其朝也、公於上等、侯伯於中等、子男於下等、各以其礼擯之、貴貴也。其燕也、公三燕、侯伯再燕、子男一燕、各以其齒坐之、老老也。貴貴者礼也、老老者仁也、賢賢者義也。爵也、齒也、德也、同為天下之達尊、而仁之於天下也、尤不可食頃而廢焉。故四代之燕、或貴爵、或貴德、或貴齒、或貴親、各從所貴而加之。然而不以爵之尊卑、德之小大為之序者、序齒而已。齒之長者先乎少、齒之老者先乎長。尚齒仁也、尚老又其仁之至諸也『集說』。○案「齒之長者」二句『訂義』脱。厥起亦脱「先王」二字。

〔周礼說〕五、秋官司寇下)

(第二章『周礼訂義』補訂(4) 参照。)

①先王之待諸侯、何其至也。未至也致積、始至也致飧。及其朝享之後、又致饗餼之大礼。食之而弗愛、豕交之也、則有問勞迭逆之示其勤。愛之而弗敬、是以獸養之也、則有辭受揖之示其恭。然恭而無其美、君子不可以虚拘也、又況其愛之乎。揖揖辭受、恭之之文也、有饗焉、則尽其恭之之美。問勞迭逆、愛之之文也、有燕焉、則尽其愛之之美。其樂無算也、取其歛而已。其爵無算、取其醉而已。取脯以降、秦陔而去、諸侯心平而氣和、相与一德以尊其上。大者比其小、小者事其大。相朝之君、相問之使、旌節繼道、何以致之。先王為之朝礼而貴貴之教寓焉、為之燕礼而老老之教寓焉。為之饗礼、設几而不倚、所以訓其恭。爵盈而不飲、所以訓其儉、是其所以致『『釈原』作「待」』之道也『『集説』、『釈原』』。

(『周礼説』五、秋官司寇下)

②先王之待諸侯、何其至也。未至也致積、始至也致飧。及其朝享之後、又致饗餼之大礼。食之而弗愛、是以豕交之也、則有問勞迭逆之示其勤。愛之而勿弗欽、是以獸養之也、則有辭受揖之示其恭。然恭而無其美、君子不可以虚拘也、又況其愛之乎。揖揖辭受、恭之之文也、有饗焉、則尽其恭之之美。問勞迭逆、愛之之也、有燕焉、則尽其愛之之美。其樂無算也、取其歛而已。其爵無算也、取其醉而已。取脯以降、秦陔而去、諸侯心平而氣和、相与一德以尊其上。大者以仁比小、小者以智事大。相朝之君、相問之使、旌節繼道、何以致之。先王為之朝礼而貴貴之教寓焉、為之燕礼而老老之教寓焉。為之饗礼

也、設凡而不倚、所以訓其恭。爵盈而不飲、所以訓其儉、是其所以致之之道也。〔《演山集》四七〕

③黃氏曰、……」〔《周礼集說》九下〕

④黃氏曰、……」〔《周礼全經釈原》一一〕

⑤黃氏曰、……」〔《周礼註疏刪翼》二六〕

補訂 (19)

①王畿之國、天下列國之所望、政令事故異乎郊野鄙之間、則不足以同千里之俗、而況天下之遠哉。先王於是自野至於京都、別為三等之采地、又於采地九十三國。公卿大夫之賢可以君衆、王子弟可以長賤。而公與子弟親者之於大都、卿與子弟疏者之於家邑、此朝大夫所以「日朝以聽國事故、以告其君長、國有政令、則令其朝大夫」也。令其朝大夫者、使之下都家之邑而已。凡都家之治有不及者、則誅其朝大夫、為其弗之告也。則都家之治於國者、其可不因朝大夫而後達乎。都司馬、家司馬備軍合卒、而有不及焉者、則二司馬之罪也。一內外之灋、達上下之意、謹始於畿內、可謂備矣。告其君長也、則為之朝大夫。教其士庶子也、則為之都司馬。君長之治不異乎國政、士庶子之學不戾乎國灋、則上下之治一矣。天下之本在國、先王所以正其本之道、何其盡善哉〔《集說》〕。

〔《周礼說》五、秋官司寇下〕

②王畿之國、天下列國之所望、政令事故異乎郊野縣都之間、則不足以同千里之俗、而況天下之遠哉。先王於是自野至於縣都、別為三等之采地、又於采地別為九十三國。公卿大夫之賢可以君衆、王子弟之貴可以長賤。而公與子弟之親者之於大都、卿與子弟之疏者之於小都、而大夫與其尤疏者之於家邑、此朝大夫所以「日朝以聽國事故、以告其君長、國有政令、則令其朝大夫」也。令其朝大夫者、使之下都家之國而已。凡都家之治有不足者、則誅其朝大夫、為其弗之告也。則都家之治於國者、其可不因朝大夫而後達乎。「大事弗因」、非掌事也、特達於朝而已。在軍旅之治有不及者、其車馬兵甲之戒令歟。都司馬、家司馬備軍合卒、而有不及焉、則二司馬之罪也。且夫朝大夫日朝以聽國事故以告之、國有政令則朝大夫下焉。王朝之事、都家得之詳矣。此八則之治都鄙、所以略於官府歟。然而先務一內外之法、達上下之意、謹始於畿內、可謂備也。告其君長也、則為之朝大夫。教其士庶子也、則為之郡司馬。君長之治不異乎國政、士庶子之學不戾乎國法、則上下之治一矣。天下之本在國、先王所以正其本之道、何其盡善也。加田無國正、正於受田之家、猶之國子及其倅歟。司馬弗正、凡國正弗及、正於諸子而已。言征則廢正之之義、言正則征在其中焉。都司馬以國法掌其政學、以聽於國司馬。大司馬大会同、則帥士庶子而掌其政令、則司馬正之矣。若有兵甲之事、則授之車甲、合其卒伍、置其有司、以軍法治之、則諸子正之矣。授之車甲、合其卒伍、是以正賦之也。置其有司、以軍法治之、是以正正之也。

③黄氏曰、……①

〔周礼集説〕九下

王与之『周礼訂義』研究の専著である夏微氏博論では、「南宋以降、黄度『周礼説』一書仍為學者所重、元人陳友仁所撰『周礼集説』・明人柯尚遷所撰『周礼全経釈原』、明人王志長所撰『周礼註疏刪翼』皆采此書之説」（二六四頁）と解説するが、筆者の調査では、三書とも黄度注は存在せず、「黄氏曰」（『周礼集説』は計十八個、『周礼全経釈原』は計八個、『周礼註疏刪翼』は計十五個）として収める注は全て黄裳の注である。さらに、「清代道光中、新昌拔貢陳金鑑于黄度『周礼説』一書不俗的経学価値、遂据王与之『周礼訂義』、陳友仁『周礼集説』、柯尚遷『周礼全経釈原』、王志長『周礼註疏刪翼』和『欽定周官義疏』輯佚此書、合編為五卷、并刊刻行世……」（同右頁）も正確に言えば、陳金鑑『周礼説』に小字で『周礼集説』、『周礼全経釈原』及び『周礼註疏刪翼』からの引用と明記されている注は黄度ではなく黄裳の注である。もっとも陳金鑑『周礼説』には『周礼註疏刪翼』からの引用と明記されている（卷一、天官食医注（総論）春秋伝曰、秦医和謂趙孟曰」の条の末尾に「『訂義』・『集説』・『刪翼』とある）にもかかわらず、実際には『周礼集説』や『周礼註疏刪翼』にないものもあり、陳金鑑の輯佚作業には問題があると言わざるを得ない。

この他にも、陳金鑑『周礼説』卷一天官疾医注に「癘疾之作或感四時之邪氣……」の末尾には「『欽定礼記義疏』・『集説』とあるが、この注も実際は黄裳のもの（『演山集』五六）である。問題はこの末尾に「『欽定礼記義疏』・『集説』と附されている点で、「集説」、すなわち『礼記集説』には「延平黄氏」として黄裳の文であることが明記されている（『欽定礼記義疏』は「黄氏」のみ）にもかかわらず、陳金鑑はあえて黄度のもものと見なしている。このような陳金鑑の態度を見る限り、黄裳注から黄度注への改変が意図的

になされたと解釈せざるを得ないと言えよう¹⁹。

以上、二章に渡って王与之『周礼訂義』と陳金鑑『周礼説』における「黄氏」の錯誤を『演山集』等と比較照合させて補訂を行った。『周礼訂義』における本文・割注（小字）の「黄氏」は巻頭の「序目」に明記してあるようにすべて黄度であるとされているが、この中に黄裳の注が計五条誤入していることが判明した。また陳金鑑『周礼説』には『周礼訂義』中の錯誤と合わせて十九条もの錯誤が判明した。全体の割合からすれば数は少ないが、そこにはやはり意図的な改変の可能性が窺えるのである。

四 「黄氏」錯誤の背景

最後に「黄氏」錯誤を繞る背景について私見をまとめて結びとしたい。結論から言えば、錯誤が生じた決定的な理由は不明である。ただ、黄裳が王学系であり、黄度が永嘉事功派であること、また王与之も永嘉道学であることを鑑みれば、この三者は『周礼』を繞って各々相對峙する関係にある。黄度が黄裳注を見ていたか否かはこれも未詳であるが、少なくとも黄度にとって王学系周礼学は乗り越えるべき対象として意識されていたことは間違いない。そして「黄氏」錯誤の直接の原因かどうかは定かでないが、その背景にはこのような思想史的な対立があり、「黄氏」錯誤をもたらした遠因となった可能性も完全には否定できないのである。よって以下の議論は所々状況証拠的資料に基づく推論を交えながら、「黄氏」錯誤が発生した原因

について能う限り迫ってみた。

宋代には黄裳と同姓同名の人物が複数名確認される。そのうち著名な人物としては本論文でとりあげた北宋の黄裳と南宋の黄裳（字文叔）が挙げられる。

前輩有兩黄裳、皆為端明殿學士。其一字冕仲、延平人、元豐進士第一、崇寧礼部尚書。其一字文叔、蜀人、事茂陵……。

（無名氏『愛日齋叢鈔』二）

北宋黄裳、字冕仲、閩之劍浦人。端明殿學士、著『演山集』。南宋黄裳、字文叔、蜀之劍州人。資政殿學士、著兼山集。

（黄裳三）、『同姓名錄』四）

偶然にも黄度の字も文叔であり、しかも『欽定礼記義疏』中の「黄氏」では黄敏求の号が「演山」（實際は兼山）とされ、黄裳の号（演山）と混同されている。

このような名や字の誤記は一般によく見られるものであり²⁰、「黄氏」を繞る錯誤も単に同姓に起因するものと言ってしまうまでもである。ただここでの混同は名や字の類似から生じたというよりも、上述のように黄裳（冕仲）が比較的目立たない人物であったことのほうが錯誤発生により直接的原因と言えるのではないだろうか。例えば、『宋史』に伝がない（『宋史翼』にはあり）ことはその証左であろう。もともと第二章『周礼訂義』補訂（一）の「理財」の箇所ですでに検証したように、『周礼訂義』における「黄氏」の錯誤は、ケアレスキスの域を超えて意図的な改竄の跡が確認される。

ただ、王安石『周礼義』と同じく黄度『周礼說』も佚文であり、更に黄裳『周礼義』や『演山集』も完本ではない。つまり肝心の資料が皆佚文であるため、現存する資料だけでは「黄氏」錯誤の決定的な証拠は

提示できないのである。よって「黄氏」錯誤の背景にある思想史的角度から、このような問題が生じた原因を推測するほかない。

黄度の思想史に関する事跡としては²¹、永嘉学派に属したことや、葉適（一一五〇～一二二三）・陳傅良（一一三七～一二〇三）・朱熹（一一三〇～一二〇〇）等道学系士大夫との交流などが知られる。とりわけ陳傅良との関係は密で、『宋元学案』「止齋学案」にも黄度は陳傅良の「学侶」とされている。また黄度『周礼説』と陳傅良『周礼説』とは「議論相出入」（葉適「黄文叔周礼序」、『水心集』一二二）の間柄であり、黄度『周礼説』の特徴として「至於天文、地理、井田、兵法、即近驗遠、可以拠依、無迂陋牽合之病」（『宋史』三九三）と指摘されるように、問題意識、対象領域においても両者は共通している。

老生宿儒、発憤推咎、以是為用周礼禍、抵排不遺力。幸以進士舉、猶列於学官。至論王道不行、古不可復、輒以熙寧嘗試之效藉口、則論著誠不得已也。故有格君心、正朝綱、均国勢說各四篇、而為之序如此。

（陳傅良「進『周礼説』序」、『止齋集』四〇）

陳傅良『周礼説』作成の目的の一つとして、この序の末で述べられているように、王安石による『周礼義』に基づく新法政策、いわゆる「周礼藉口論」の呪縛から『周礼』を解放することが挙げられよう。先に指摘した通り、王安石『周礼義』はそれ以降の注にとって乗り越えなければならない批判対象であった。黄度が注疏と王安石『周礼義』を意識して『周礼説』を作成したことは自然の趨勢であったと言える。

往年徐居厚言、「文叔蚤為諸経解、書略具矣」。時公未四十也。頃歲、每有学者自金陵至、言公常用『周礼注疏』与王氏『新説』參論、夜率踰丙、昼漏未上、輒扣門曰、「已悟」。於是公七十四五矣。嗚

呼、斯可謂以學始終歟。

（葉適「黃文叔詩說序」、『水心集』一二）

葉適の言によれば、黄度は常々『周礼注疏』と『周礼義』を参照していたようである。実際に黄度『周礼説』をみると黄度が鄭玄と王安石の周礼説の精読及びその批判を試みたことがわかる。ただ気になるのは、『周礼説』において注疏批判の割に王学批判が極端に少ないことである。

『周官』晚出、而劉歆遽行之、大壞矣。蘇綽又壞矣、王安石又壞矣。……新昌黃文叔始述五官、而為之説、疊疊乎孔孟之以理貫事者、必相發明也、惻惻乎文武之以己形民者、必相緯經也。……洗滌三壞之腥穢、而一以性命道德起後世之公心、雖未能表是書而独行、猶將合他經而共存也、其功大矣。同時永嘉陳君拳亦著『周礼説』十二篇、蓋嘗獻之紹熙天子、為科學家宗尚。君拳素善文叔、議論相出入、所以異者、君拳以後準前、由本朝至漢、遡而通之。文叔以前準後、由春秋戰國至本朝、沿而別之。其叙鄉遂溝洫、辨二鄭是非、凡一字一語、細入毫芒、不可損益也。

（葉適「黃文叔周礼序」、『水心集』一二）

丘葵は上記の文「洗滌三壞之腥穢、而一以性命道德起後世之公心」を引いて、黄度『周礼説』を「是書無不可」（『経義考』一二五、「丘氏（葵）周礼全書（一日周礼補亡）」条）と評しているが、ここで注目すべきは「性命道德」によつて「一」にするという表現である。「一道德」は言うまでもなく王学の最重要テーゼであり、「性命道德」も王安石『周礼義』の根底をなす重要概念であった。ではなぜ葉適は王安石の周礼学を否定しておきながら、このような王学を連想させる語を用いて序を附したのか²²。

葉適は表面上激烈に王安石の学を否定しているが、彼の経解を見ると一部明らかに王安石注を参考にし

たものもみえる。以下比較のために該当箇所と思われる部分を長文であるが挙げておく。

石林葉氏曰、莫非制也。於袞而特言之者、以衣服制之顯者。蓋一陰一陽之謂道。道之在天者、以日月為之運、星辰為之紀、其施於人則仁而已。無為而仁者、山也。仁而不可知者、龍也。仁藏於不可知而顯於可知者、礼也。礼者、文而已。其文可知者、華蟲也。凡此皆以象天德也。天德者、陽也。故作繪而在上。宗彝者、則虎雉之彝也。何以知其然。以礼謂之蟲、而鄭氏謂之虎雉。鄭氏必有所受之、是以知其然也。虎者、義也。雉者、智也。雉能以尾室鼻、而禦雨患、是能達於体用、趨時能變、此所以為智也。為虎又象之於宗彝者、以其奉宗廟為大事也。其清足以自潔而可薦者藻也。其明足以燭物、而可以烹飪者火也。米、養人也。粉之則其利散而均於養人而已、不足以為道、必有以裁制之。斧者所以為裁斷也。裁斷不可以無辨黼者、辨物之謂也。其位在東北陰陽、於是辨焉。凡此所以象人德。……

『礼記集說』二七

祀昊天上帝、則大裘而冕、祀五帝亦如之者、大裘無經緯之文、無絵繡之功、其色則復乎至幽而已。群而不党、則又由天道而公焉。致恭以有礼、則事至尊之道也。故以祀昊天為称。祀五帝則如之而已。五帝之為德、則既有所分矣、裘不可徒服、蓋亦服袞。故『礼記』言「郊之祭、王被袞以象天」也。冕後方而前円、後仰而前俛、玄表而朱裏、後方者、不變之体。前円者、無方之用。仰而玄者、升而辨於物。俛而朱者、降而与万物相見。曰冕、則以其於万物相見名之也。夫璧以円為体、而冕以方為体者、以方為体、則以円為用。以円為体、則以鋭為用。以鋭為用、非道之全也。故執之而已。享先王、則袞冕、

享先公饗射、則驚冕、祀四望山川、則毳冕、祭社稷五祀、則希冕、祭群小祀、則玄冕者、各称其事而已。先公之尊也、而所服止於驚冕、非卑之於先王。以為祭則各以其服授尸、尸服如是、而王服袞以臨之、則非所以為敬。故弗敢也。祭社稷五祀、所服止於希冕、則亦非卑之於饗射也。以為社稷五祀之所上、止於利人。故衣粉米而已。以書考之、古人之象、凡十二章。蓋一陰一陽之謂道、道之在天、日月以運之、星辰以紀之。其施於人也、仁莫尚焉。無為而仁者、山也。仁而不可知者、龍也。仁藏於不可知而顯於可知者、礼也。礼者、文而已。其文可知者、華蟲也。凡此皆德之上、故繪而在上。宗彝、則虎雉之彝。虎、義也、雉、智也。象之於宗彝、則又以能常奉宗廟為孝焉。柔順清潔、可以薦羞者藻。昭明齊速、可以亨飪者火。藻也、火也、則所以致其孝。米、養人也。粉之然後利散而均焉。養人而已、而無斷以制之、非所謂知柔剛、黼則所以為斷也。用斷不可以無辨、黻則所以為辨也。凡此皆德之下。故絺繡而在下。然辨物者、德之所以成終始也。至周登三辰於旗、而登龍於山、則作服九章而已。蓋於是時、其為王也純矣、則其於天道也、志之而已。袞冕則九章之服、公所服也、而王亦服焉。故文從公衣而音從。音從、上下通也。

（王安石『周礼義』春官司服注）

この葉適の注は『礼記集說』のみに見えるものであり、あるいは王安石もしくは黄裳注の誤りである可能性も否定できないが、この他にも王安石の注に類似する文が葉適の経解には時々見受けられる。

このような王安石と葉適との關係を黄裳と黄度に当てはめるのは些か無謀であるかもしれない。しかし、『周礼訂義』及び陳金鑑『周礼說』の「黄氏曰」を繞る錯誤や黄度が王学を意識していたことを勘案すると、兩者の間には一般に考えられている徑庭よりもある部分では非常に近しい關係にあるのかもしれない。陳金

鑑の錯誤を肯定的に捉えるならば、陳金鑑は黄裳と黄度の間に思想的に疎通する部分があると考え、黄裳注を黄度のものとみなしたと解釈することもできよう。

王与之の王学に対する態度は黄度に比べより批判的であり、道学よりであるといえる。その分かりやすい例として、『周礼訂義』序目の「編類姓氏世次」における王学の扱いが挙げられる。すなわちその序目姓氏には、漢から宋（国朝）まで計五十一家の注釈を載せ、姓名ごとに王朝名と出身地もしくは号を付すが、王学系の姓氏には王安石の「臨川王氏」と記す以外は、出生地も号も付されておらず、「王氏（昭禹）」、「陸氏（佃）」、「陳氏（祥道）」、「方氏（盤）」と氏名のみしか記されていない。永嘉事功派の独自性と反王学の旗幟を示したい王与之の思想的態度は黄度よりも明瞭であるが、かといって『周礼訂義』所収の「黄氏」を黄裳から黄度のものへと改竄したことを裏付ける直接的な証拠はないのである。

「黄氏」錯誤を繞る直接的原因はやはり判然としない。ただ、その背景には黄裳（王学）↓黄度（永嘉事功派）↓王与之（永嘉道学）という思想上の流れが読み取れ、その流れの過程で、黄裳を媒介にして王学の周礼思想の一部が永嘉事功派に流入した可能性が全く無かったとは言いが切れない。基本的に王学批判の立場を取る黄度にあっても、経世致用を志向する王学の経解に首肯する部分もあったはずである。しかしながら上述のように王安石『周礼義』、黄裳『演山集』、黄度『周礼説』のすべてが佚文であり、また王与之『周礼訂義』の引用方法や陳金鑑による黄度注の偏向的輯佚という資料上の不備に阻まれ、実際に黄度を始めとする永嘉事功派がどのように王学を受容したのかは依然として判然し難い。もつとも従来の王学与永嘉事功派、もしくは永嘉道学との関係に対する通念を再検証すべきことは「黄氏」を繞る問題からも明らか

であり、今後も継続して検討すべき課題と言えよう。

1 黄裳と王安石の経義との関係については、朱剛氏が、「現存北宋“経義”の最早一批作品、在元豐五年狀元黄裳の《演山集》中。那是比王安石本人的文章更難読懂的、但黄裳由此獲得狀元」（『太学体』及其周辺諸問題）（『文学遺産』二〇〇七、第五期、種村和史訳『太学体』およびその周辺の諸問題について）（宋代詩文研究会会誌『橄欖』二〇〇八）第四章）と、経義の側面から両者の関係を簡単に紹介している。

2 「頗從事於延年養生之術、博覽道家之書、往往深解而參諸日用」（程瑀「宋端名殿學士正議大夫贈少傅黄公神道碑」〔『演山先生文集』附〕と道家の思想、とりわけ養生術に長けていたとされ、『演山集』においても養生論が散見される。実際に、享年八十七歳と宋代の狀元獲得者の中で最も長寿であった。黄裳の養生論については、劉国盛、肖海燕、熊鉄基『中国莊学史』（人民出版社、二〇一三）第五章「宋元時期的莊学（上）」の第八節「黄裳的莊学思想」を参照。

3 黄裳の事跡については、程瑀「宋端名殿學士正議大夫贈少傅黄公神道碑」、陸心源『宋史翼』卷二六参照。馬里揚氏碩士論文『演山詞研究』（南京師範大、二〇〇八）には黄裳の年譜を載せ、非常に有益である。

4 本稿で底本にした静嘉堂文庫所蔵『演山先生文集』六十卷附録一卷は明、謝肇淛（字は在杭、福建長楽人）蔵書の小草斎影宋鈔本であり、清代に周亮工（字は元亮、号は樸園、滅斎、河南祥符人）、李馥（又の名を端方、字は子敬、号稲人、湖南祁東人）を経て陸心源の蔵となった。毎頁二十行、毎行二十字、版心には「小草斎抄本」とあり、「晋安謝氏

家藏図書」の朱文大方印と、「周元亮鈔本」の白文方印、「曾在李鹿山処」の朱文方印が押されている。この静嘉堂本の他に『演山先生文集』六十卷附録一卷（清初鈔本、四川大学古籍整理研究所編『儒藏 宋集珍本叢刊』二三、綫裝書局、二〇〇四。以下「儒藏本」と略称）、文淵閣四庫全書本（以下「四庫本」と略称）、『全宋文』（四庫本を底本として中国国家図書館蔵の清抄本等で校訂）を適宜参考にした。静嘉堂本、儒藏本、四庫本はそれぞれ文字に異同が見られるもの、三書とも巻数は同じ六十巻である。四庫本は附録を付さない。『演山集』の書誌については馬氏前掲碩士論文「二、演山詞版本考」に詳しい。

5 夏微博士論文『《周礼訂義》研究』（四川大学、二〇一一）二六五頁。

6 これとは逆に黄裳ではなく他者のものとして誤って混合されているケースとして、呉澄『礼記纂言』及びそれを襲う徐乾学『読礼通考』巻五四に一箇所確認される。

・延平黄氏曰、礼制云三日、而曾参喪親不食七日……『礼記纂言』一四下

・黄裳曰、礼制雖云三日、而曾参喪親不食七日……『読礼通考』五四

・黄氏曰、楽正子当時之賢者也。師必在慕其德行、而師之者也。礼制雖云三日、而曾参喪親不食七日……（『余義』）衛湜『礼記集説』

・黄氏云、礼制雖云三日、而曾参喪親不食七日……納喇性德『陳氏礼記集説補正』七

呉澄・徐乾学は黄裳注とし、衛湜は黄敏求とする。黄裳は「演山先生」、黄敏求は「演山黄氏敏求」と非常にややこしい。ただ、呉澄『礼記纂言』中に「延平黄氏曰」は上記一条を含め全部で三条確認され、残り二条は黄裳『演山集』に同文を収める。また『礼記纂言』には敏求の『礼記余義』からの引用が確認できず、呉澄は恐らく『礼記余義』を見ていな

いと思われる。よって黄裳『演山集』未収の佚文である可能性が疑われるが、詳細は不明である。

7 『周礼集説』中に「雑説曰」なる注が散見されるが、これは陳傅良・陳汲・陳亮等の注が混在した「雑説」であり、黄裳『演山集』の「雑説」ではない。

8 釈曰黄氏曰、内史掌八柄与冢宰同地愈親任愈……曰以卑非成周建官之意。史之官有二、太史掌天时与礼者。故……二官不同。（『周礼全経釈原』六） 正義黄氏度曰、内史掌八柄之灋与冢宰同地親任重、故爵秩高而置官広。（『欽定周官義疏』一七）。

9 三礼諸注の善本については、王鏐『三礼研究論著提要』（甘肅教育出版社、二〇〇一）を参照。

10 この箇所における王与之の理財論については、夏氏博論三三七～三三八頁に詳しい。

11 『周礼訂義』では泉府の理財論を繞つて、陳傅良、徐牧齋、李叔宝の説を載せ、最終的には、「不如陳及之之説曰、立法不惟以便下、苟下得其利、而官失其物、則非法也。泉府藏物多矣、……王荊公・呂嘉問為市易官、掎克細民、聚斂滋甚、豪商大賈、怨咨盈道。及人有言、則曰『泉府』。嗚呼、吾不知先王之法、使人怨咨而尚不顧哉」（『周礼訂義』二四）と陳汲の説を最も評価する。陳汲は永嘉人で葉適の友人。王与之は当然永嘉最良であり、陳汲の周礼観は折衷的といえる。

12 本田二郎『周礼通釈』三九九頁。因みに鄭注・賈疏ともこの「道」については言及がない。

13 黄裳と王昭禹の注においてこの箇所の他にも語句レベルで類似する文や同内容の解釈が散見されることから、両者に共通する注は王安石『周礼義』の佚文である可能性がある。『周礼詳解』と同じような趣旨の議論は易祓『周礼総義』にもみえる。易祓は基本的に反王学の立場であるが、時に王学系注解をそのままなぞるような解釈をとることもある。

王学系周礼が後の周礼解釈に与えた影響を考える上で甚だ興味深い事例であるが、詳細な論証は今後の課題としたい。

14 道德の二分法の原典は『莊子』天地「無為為之之謂天、無為言之之謂德」などにみえ、王安石のそれも『莊子』を典拠とする。ただ王安石は『莊子』で説かれる道德の虚無性を払拭し、あくまで有為の場で道德論を展開すべきと主張した。この二分法については、例えば次のように糾弾される。「王氏多以天為道、帝為德、謂道至矣則格于皇天、德至矣則格于上帝。而說者又於伊尹一人之身而分道与德、其鑿甚矣」（林之奇『尚書全解』三三、君奭注）。

15 因みに、黄宗羲『明文海』には李濂の「医説」として類似した文を載せる。これも實際は黄裳『演山集』五五「雄説」の一部改変した文章であるが、黄裳の名は記されていない。「天有五行、歳有四時、人有五臟、庖有五味……而王之飲齊脉」（黄宗羲「医説（李濂）」『明文海』一〇五）。

16 この箇所における『演山集』及び『周礼詳解』の典拠と考えられるのが、王安石『周礼義』の次の二つの注である。
「謂之建邦之天神・人鬼・地示之礼、則礼当自王出故也。謂之事邦国之鬼・神・示、則其所事、非特王国而已。禋者、意之精也、無事於氣矣。血者、物之幽也、無事於形矣。実柴燔燎、用氣而已。狸沈鬯辜、則用形焉。氣親上、形親下、則各從其類也。柴而実牲、然後燔燎、天祀之所同也。或言実柴、或言燔燎、則相備而已。相備而言実柴於上、言燔燎於下、以先後為尊卑也。山林之受物也、以狸。川沢之受物也、以沈。以狸沈祭焉、則各以其物宜也。四方異体、肆而不全。百物異用、制而不變。以鬯辜祭焉、則亦各以其物宜也。……」（春官大宗伯注）。「孔子齊必変食者、致養其体氣也。王齊日三舉、則与変食同意。孔子之齊、不御于内、不聴楽、不飲酒、不膳葷、喪者則弗見也。不謁則弗見也。蓋不以哀楽欲惡貳其心、又去物之可以昏憤其志意者、而致養其気体焉。則所以致精明之至也、夫然後可以交神明矣。然此特祭祀之齊、尚未及夫心齊也。所謂心齊、則聖人以神明其德者是也。故其哀楽欲惡、将簡之弗得、尚何物之能累哉。雖然、知致一於

祭祀之齊、則其於心齊也、亦庶幾焉」（天官膳夫注）。黄裳注と王注を比較すれば、黄裳は王注を敷衍するかたちで注釈していることがわかる。

17 万物莫不有至理焉。能精其理、則聖人也。精其理之道在乎致其一而已。致其一、則天下之物可以不思而得也。『易』曰、「一致而百慮」。言百慮之帰乎一也。苟能致一以精天下之理、則可以入神矣。既入於神、則道之至也。夫如是、則無思無為寂然不動之時也。雖然、天下之事固有可思可為者、則豈可以不通其故哉。此聖人之所以又貴乎能致用者也。致用之效始見乎安身。蓋天下之物莫親乎吾之身。能利其用以安吾之身、則無所在而不濟也。無所往而不濟、則德其有不崇哉。

『易』曰、「精義入神以致用、利用安身以崇德」、此道之序也（『王文公文集』二九）。

18 管見の限り、「義疏」（『欽定周官義疏』、『欽定儀禮義疏』、『欽定禮記義疏』）に該当する文は見当たらない。

19 同様に、陳金鑑『周礼説』三上春官大宗伯注に「君子事其尊……」とあるが、これも實際は黄裳の注（『演山集』五八）であり、『礼記集説』には「延平黄氏曰」、「欽定礼記義疏」には「黄氏裳曰」と明記されているにもかかわらず、陳金鑑は黄度のものと見なしている。

20 例えば次の文では、鄭鏐の字が剛中であることから、鄭剛中（字は亨仲）と混同されている。「宋鄭剛中撰。剛中、字亨仲、金華人。紹興二年進士及第。……王心麟『困学紀聞』称鄭剛中有『周礼解義』。考王与之『周礼訂義』首列諸家姓氏、有三山鄭鏐、字剛中、淳熙中進『周礼全解』。蓋別自一人、字与剛中名偶同、或混而一之、非也」（『周易窺余』四庫提要）。

21 黄度の事跡については袁燮「龍図閣學士通奉大夫尚書黄公行狀」（『絜齋集』一三）に詳しい。黄度の專論のうち經学を扱った論文としては、陳恆嵩「黄度及其《尚書說》研究」（『宋代經学国際研討会論文集』所収、二〇〇六）があり、

その巻頭にも詳しい事跡を載せる。

22 王安石と葉適との関係については、何俊氏が兩者の立場の類似性や問題意識の共通点を指摘している。「同様、葉適と王安石固然没有師承的關係、并且葉適对王安石也有非議、但這決不必然導致他們在思想的興奮点上發生分離。實際上、無論是北宋、還是南宋、根本的社會問題依然如故、作為同樣是对社會充滿責任感的思想家、葉適与王安石為其社會開出的具體藥方、如何抑制土地兼并、如何解決國家財政不足等可能有別、但關注這些問題、以及試圖解決這些問題的切入点乃至基本方法是一致的」(「葉適与道統」、《温州大學學報》二〇〇五年五月第二期)。

(補記) 本論文は二〇一四年八月十九〜二十一日、中国杭州にて開催された「10至13世紀中国国家与社会」國際學術研討会・中国宋史研究会第16届年(中国宋史研究会・杭州師範大學主催、於百瑞運河大飯店、第六組「教育・文化・思想學術与宗教信仰」の口頭発表用として投稿した論文(「三礼諸注的“黃氏”補訂及其相關問題——以黃裳為中心」)に加筆・訂正したものである。学会にお招きいただいた中国宋史学会副会長で杭州師範大學國學院副院長の范立舟教授、並びに発表準備に協力していただいた杭州師範大學の申緒璿講師の御兩名には格別のご厚情を賜った。ここに深謝の意を表する。